

【研究資料】

在宅ケア実習施設におけるケアスタッフの看護実習に関する認識

Care Staff's Perceptions of the Home Care Nursing Practicum

佐和田重信, 稲垣 絹代, 永田美和子, 八木澤良子

要旨

名桜大学看護学科の在宅ケア実習は、在宅ケアに関わりの深い介護サービス施設や訪問看護ステーション・診療所など多岐にわたる施設で行われている。今回、実習に関する施設スタッフの認識を明らかにし、在宅ケア実習の課題やあり方について検討することを目的として、ケアスタッフを対象に無記名自記式アンケート調査を実施した。

職種では介護職が有意に実習への関心が低い傾向にあり、また実習指導者と比較してケアスタッフは実習への興味・関心が低い傾向であった。記述内容から実習の課題について抽出し、カテゴリー化を行った結果、「学生の積極性の不足」「学生と関わる機会の不足」「実習目的や内容の理解不足」「実習期間の短さ」「利用者や業務への悪影響」「実習の受け入れの困難感」の6カテゴリーに分類できた。

学生が在宅ケア施設で実習を行うことは学生だけの学びではなく、施設スタッフのケアの質向上のためにも意味のあることと考えられ、多職種連携や協同を考慮した北部地域全体のケアの質向上につながる在宅ケア実習に向けて取り組むことが重要であると考えられた。

I はじめに

わが国は超高齢社会を迎え、その対応として、また、福祉の充実化を目指して各種施策が打ち出され、それに伴って医療・介護の分野においては「多職種による連携及び協働」の必要性がますます増大している。

厚生労働省の「地域における医療及び介護を総合的に確保するための基本的な方針」によると、多職種が連携して取り組む環境づくりを進めていくことが重要とされ、「質の高い医療・介護人材の確保と多職種連携の推進」などを基本的な方向性として掲げている⁽¹⁾。

このような中、在宅看護は対象者が生活の場で療養しているすべての人であることや社会保障制度の運用の中でその地域の資源を有効活用しながらその人にあったケアシステムを構築し、チームケアを行うという特徴がある⁽²⁾。在宅看護実習における看護学生の学びとしては、「生活の場」で看護の視点からケアマネジメント・連携機能を活用しながら、在宅療養の主体である療養者やその家族の健康とQOLの向上を支え、多次元的・概念的の学びをしている⁽³⁾ことが報告されている。また、幅広いライフサイクルを持つ在宅療養者や多様な家族形態・介護者・多岐にわたる疾患を経験している⁽⁴⁾ことが報告されている。

一方、看護師・保健師教育のうち医療機関や施設等での実習は、他職種との連携についての施設内でのカンファレンスや専門職からの話題提供に終わり、在宅の高齢者を対象にした実習教育は少ない⁽⁵⁾ことや教育背景が異なると、背景としている職業観から対象に対する理解の仕方・支援の考え方等にも違いがあることから多職種間連携・コミュニケーションの方法を学ぶ必要性が報告されている⁽⁶⁾。

超高齢社会が進行するなか看護の役割は拡大し、在宅療養者やその家族を支えるためには医療、介護、相談職等の質の向上とともに連携が不可欠であり、医療施設以外での看護実習の重要性は増している。

本学の位置する沖縄県北部は山間へき地や離島を含む広大な地域であり、過疎化の進行と高い独居率や医療・介護・福祉サービスの慢性的な不足や偏在など多くの課題を抱えている。このような環境の中、本学における在宅ケア実習(1単位)は在宅ケアに関わりの深い介護サービス施設や訪問看護ステーション・診療所など多岐にわたる施設で行われており、実習施設には看護職の配置規定がない介護サービス施設も多いことから、看護職以外のスタッフが学生の実習指導を行っている施設もある。

これまで実習を終えた学生のレポートを分析した結果では、在宅療養者を支える多くの施設やその役割・特殊

性・看護職の役割や他職種との連携・地域との関係の重要性等を学び、地域の施設や医療機関を利用しながら多くの高齢者や障害者が在宅で療養している現実を実感し、在宅ケア実習を通して地域における医療・保健・介護・福祉の現状や課題を考える機会になっている⁽⁷⁾。

今回、在宅ケア実習を現行の方法にシフトして3年が経過したことに加え、在宅ケア実習に対するケアスタッフの認識は看護学生の学びにも影響を及ぼすと考えられるため、実習施設のケアスタッフを対象にアンケート調査を実施した。

看護学生の実習に関する先行研究では、訪問看護ステーションにおける実習指導者や学生のレポート・授業評価をデータとして分析した研究がほとんどであり、在宅ケア実習における施設ケアスタッフに焦点を当てた研究は見当たらない。

本研究では、実習施設に勤務するケアスタッフの実習受け入れに関する認識を明らかにし、在宅ケア実習の今後の課題について検討することを目的とした。

II 本学における在宅ケア実習の概要

在宅ケア実習の目標は以下のとおりである。

1. 在宅療養者の生活を知り、利用する施設・制度・社会資源を理解する
2. 在宅療養者とその家族を援助している多くの職種の役割について理解する
3. 在宅看護の機能と役割を理解し、訪問看護の基本的な技能を理解する
4. 在宅・施設・医療機関の連携方法を知り、継続看護について考える
5. 在宅ケアと在宅看護の課題と対策について考察することができる

実習の方法は1人の学生が北部地域の施設で2日ずつ2ヶ所の施設で実習を行い、5日目には学内での実習報告会を行っている。実習施設として、診療所3ヶ所、訪問看護ステーション3ヶ所、訪問介護事業所1ヶ所、デイサービス・デイケア7ヶ所、認知症対応型グループホーム3ヶ所、居宅介護支援事業所3ヶ所、小規模多機能型居宅介護施設3ヶ所、精神科訪問看護・地域支援室1ヶ所の計24ヶ所である。学生は各施設に1～2人を配置し、教員は3～4ヶ所を1日で巡回しながら、1日1度の実習施設訪問やカンファレンスに参加している。また、学生は実習期間中に1人の利用者を受け持ち、在宅療養者の理解を深める目的でセンター方式の記録用紙と施設ケアを観察する目的でパーソンフォードの維持観察記録用紙を用いた記録を行っている。

III 研究方法

1. 研究期間

平成25年10月から平成26年3月

2. 対象

平成25年度の在宅ケア実習を受け入れている24施設のケアスタッフを対象とした。

3. 調査方法

在宅ケア実習を受け入れている24施設のケアスタッフを対象として、在宅ケア実習の認識(実習への関心、学生との接触状況、実習方法、実習の影響、実習受け入れ)に関する5項目13設問を独自に作成し、「思わない」に1点から「とても思う」に4点を配点した4段階尺度による無記名自記式アンケート調査を実施した。また、各項目について自由記述を求めた。

4. 分析方法

アンケート用紙150枚配布のうち94名から回答が得られ(回収率62.7%)、在宅ケア実習の認識に関して職種および実習指導者とケアスタッフの比較、検討を行った。また、自由記述は在宅ケア実習における課題と思われる内容を抽出し、カテゴリ分類し、検討を行った。統計的分析は統計ソフトSPSS Ver. 18を使用した。

5. 倫理的配慮

施設管理者へ研究への協力・参加は自由意思であること、匿名性の確保などについて説明し、同意書を得た上で実施した。なお、調査は名桜大学の倫理審査委員会承認後に実施した。

IV 結果

1. 基本属性

対象者の性別では男性22名(23.7%)、女性70名(76.1%)で、年齢では50代が27名(29.0%)でもっとも多く、次いで30代21名(22.6%)、40代19名(20.4%)であった。

職種では看護職16名(17.6%)、介護職63名(69.2%)、相談職・介護支援専門員が10名(11.0%)、その他2名(2.2%)であり、勤続年数では5～10年未満が30名(32.6%)でもっとも多く、次いで1～3年未満が18名(19.6%)、3～5年未満が15名(16.3%)であった。

事業所種類では通所系が41名(44.4%)でもっとも多く、次いで地域密着型37名(39.8%)、訪問系12名(12.9%)、在宅系3名(3.2%)であった。

また、対象者のうち実習指導者は21名であり、指導者の職種では看護職8名、相談職・介護支援専門員7名、介護職5名、その他1名であった。

表1 基本属性

		N	%
性別	男	22	(23.7)
	女	70	(76.1)
年齢	20代	18	(19.4)
	30代	21	(22.6)
	40代	19	(20.4)
	50代	27	(29.0)
	60以上	8	(8.6)
職種	看護職	16	(17.6)
	介護職	63	(69.2)
	相談職、介護支援専門員	10	(11.0)
	その他	2	(2.2)
勤続年数	1未満	8	(8.7)
	1-3未満	18	(19.6)
	3-5未満	15	(16.3)
	5-10未満	30	(32.6)
	10以上	21	(22.8)
事業所種類	在宅系	3	(3.2)
	訪問系	12	(12.9)
	通所系	41	(44.1)
	地域密着型	37	(39.8)
指導者	看護職	8	(38.1)
	介護職	5	(23.8)
	相談職、介護支援専門員	7	(33.3)
	その他	1	(4.8)

2. 職種と在宅ケア実習の認識の比較 (表2)

職種について実習の認識を比較すると全体的に介護職で平均得点が低くなっていた。学生への関心に関する項目では「学生と積極的にかかわりたい」「学生の学びに関心がある」の設問で有意差がみられ、相談職・介護支援専門員で高くなっていた。学生との接触状況に関する項目では「学生とのコミュニケーションが取れた」「学生と一緒にケアを行った」の設問で有意な傾向がみられ、看護職と相談職・介護支援専門員で高くなっていた。実習方法、実習の影響に関する項目ではすべての設問において有意な差はみられなかった。また、実習の受け入れに関する項目では「自分自身の学びになった」の設問で有意な傾向がみられ、相談職・介護支援専門員で高くなっていた。

表2 職種と在宅ケア実習の認識の比較

		看護職 平均(SD)	介護職 平均(SD)	相談員・CM 平均(SD)	p値
学生への関心	学生と積極的にかかわりたい	3.3 (0.6)	3.0 (0.7)	3.6 (0.5)	0.01
	学生の学びに関心がある	3.7 (0.5)	3.3 (0.8)	3.8 (0.4)	0.02
学生との接触状況	学生とのコミュニケーションが取れた	3.4 (0.6)	3.0 (0.6)	3.3 (0.5)	0.07
	学生への指導を行った	2.9 (0.5)	2.7 (0.7)	3.1 (0.6)	0.21
	学生と一緒にケアを行った	3.2 (0.5)	2.9 (0.6)	3.3 (0.5)	0.07

		看護職 平均(SD)	介護職 平均(SD)	相談員・CM 平均(SD)	p値
実習方法	実習の目的や内容を理解していた	3.2 (0.6)	3.0 (0.6)	3.3 (0.5)	0.28
	実習期間は適切である	2.8 (0.7)	3.0 (0.8)	3.3 (0.7)	0.19
	オリエンテーションは適切であった	3.0 (0.6)	3.1 (0.7)	3.2 (0.6)	0.72
	カンファレンスは適切であった	3.2 (0.6)	3.2 (0.7)	3.4 (0.5)	0.74
実習の影響	利用者への影響があった	3.0 (1.0)	3.2 (0.8)	3.4 (0.8)	0.50
	業務への影響があった	2.8 (1.0)	2.6 (0.9)	2.9 (0.7)	0.41
実習の受け入れ	実習を受け入れてよかった	3.3 (0.6)	3.4 (0.7)	3.8 (0.4)	0.15
	自分自身の学びにもなった	3.4 (0.5)	3.1 (0.8)	3.6 (0.5)	0.07

Kruskal-Wallis test

3. 実習指導者とスタッフによる在宅ケア実習の認識の比較

実習指導者とケアスタッフについて実習の認識を比較すると、学生への関心に関する項目では「学生と積極的に関わりたい」「学生の学びに関心がある」の設問で有意差がみられ、実習指導者で高くなっていた。

学生との接触状況に関する項目では「学生へ指導を行った」「学生と一緒にケアを行った」の設問で有意差がみられ、実習指導者で高くなっていた。また、実習方法に関する項目では「実習の目的や内容を理解していた」「カンファレンスは適切であった」の設問で有意差がみられ、実習指導者で高くなっていた。業務や利用者への影響に関する項目の設問では有意差はみられなかった。実習の受け入れに関する項目では「自分自身の学びになった」の設問で有意差がみられ、実習指導者で高くなっていた。

表3 実習指導者とスタッフによる在宅ケア実習の認識の比較

		実習指導者 平均(SD)	スタッフ 平均(SD)	p値
学生への関心	学生と積極的に関わりたい	3.7 (0.5)	3.0 (0.7)	0.00
	学生の学びに関心がある	3.7 (0.5)	3.3 (0.8)	0.02
学生との接触状況	学生とのコミュニケーションが取れた	3.3 (0.6)	3.0 (0.6)	0.13
	学生への指導を行った	3.1 (0.6)	2.6 (0.6)	0.00
実習方法	学生と一緒にケアを行った	3.2 (0.4)	2.9 (0.7)	0.03
	実習の目的や内容を理解していた	3.4 (0.6)	3.0 (0.6)	0.02
	実習期間は適切である	3.1 (0.7)	2.9 (0.8)	0.34
	オリエンテーションは適切であった	3.2 (0.6)	3.0 (0.7)	0.40
実習の影響	カンファレンスは適切であった	3.5 (0.5)	3.1 (0.7)	0.03
	利用者への影響があった	3.4 (0.7)	3.1 (0.9)	0.21
実習の受け入れ	業務への影響があった	2.8 (0.8)	2.7 (0.9)	0.41
	実習を受け入れてよかった	3.6 (0.6)	3.4 (0.7)	0.21
	自分自身の学びにもなった	3.5 (0.5)	3.1 (0.8)	0.05

Mann-Whitney U test

4. 自由記述内容のカテゴリー分類

自由記述から全部で270のコードが得られた。そのうち、肯定的内容は212コードが抽出され、「高齢者へ良い刺激がある」及び「自分自身の学びや振り返りになる」の内容が134コードと約半数以上を占めていた。一方、実習の課題と思われる内容が58コード抽出された。

今後の課題と思われる58コードについてカテゴリー化を行った結果、「学生の積極性の不足」「学生との関わり不足」「実習目的や内容の理解不足」「実習期間の短さ」「利用者や業務への悪影響」「実習の受け入れの困難感」の6カテゴリーに分類された。

「学生の積極性の不足」は“学生により積極性に差が見られる”や“わからないことを積極的に聞いてほしい”などの8コードから構成された。「学生との関わり不足」は“実習指導担当者でないのであまり接することができない”や“ほとんど接することがなかった”などの9コードから構成された。「実習目的や内容の理解不足」は“実習生が来ますとのみ聞いていて何のためかを実習生に聞くこともできなかった”や“介護職なのでホールの仕事と一緒にできただけで細かい目的や内容は把握できなかった”などの13コードから構成された。「実習期間の短さ」は“2日間の実習では学ぶことが限られてくる”や“もっとたくさん教えたいことあるが、2日間だったので残念”などの10コードから構成された。「利用者や業務への悪影響」は“自分の業務ができず、実習の日は残業して補っている”や“知らない人の顔を見ると落ち着かなくなる利用者さんがいる”などの13コードから構成された。「実習の受け入れの困難感」は“受け入れの態勢が整っていない”や“在宅ケアのことを知ってもらいたい気持ちはあるが、個人の家にさせていただくのが難しいところもある”などの4コードから構成された。

表4 自由記述内容のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー
学生の積極性不足	もっと積極的にスタッフ、利用者とは話を聞いてほしい
	学生により積極性に差がある
学生との関わり不足	実習指導担当者でないので接することができない
	あまり実習生とはかかわっていない
実習目的や内容の理解不足	実習生がくるとのみで何のためかわからない
	学生と接する時間が少ないため目的や内容を理解できない 実習生が何をしたいのか何を学んでいるのかわからない
実習期間の短さ	日数が2日間と短いので指導も限られる
	2日間では利用者の話を聞くだけの話し相手が終わる
利用者や業務への悪影響	知らない人の顔を見ると落ち着かなくなる利用者
	利用者へ後のフォローが必要 自分の業務ができず、実習の日は残業して補う

	カンファレンスやオリエンテーションを行うため業務に支障
	スタッフとしての精神的な負担
実習の受け入れの困難感	受け入れの態勢が整っていない
	受け入れたい気持ちはあるが回数はあまり多くできない

V 考察

1. 職種による在宅ケア実習の認識について

今回アンケート調査の対象者のうち、介護職が63名で約70%を占め、看護職が16名、相談職・介護支援専門員が10名であった。

職種による実習の認識の比較では、相談職・介護支援専門員で実習に関する認識の得点が高く、介護職で低くなっていた。本学の在宅ケア実習では相談職・介護支援専門員は学生を同行しながら利用者宅を訪問する形態であることから、学生個々と密に関わる機会が多いと考えられ、実習に関する認識が高くなったと考えられた。また、学生への関心に関する項目では「学生と積極的に関わりたい」「学生の学びに関心がある」の設問では介護職で有意に低く、学生との接触状況に関する項目では「学生とコミュニケーションが取れた」「学生と一緒にケアを行った」の設問で、実習の受け入れに関する項目では「自分自身の学びになった」の設問では介護職で有意に低い傾向が認められた。

蒔田ら⁽⁸⁾は介護職の多い実習施設において、各専門職は独自の教育を受けており教育背景が異なると、背景としている職業観から対象に対する理解の仕方・支援の考え方等にも違いがあることが考えられるとして、多職種連携のコミュニケーションの困難さを指摘している。

本研究における対象者の職種では介護職が約70%近くを占めており、看護職とは異なる教育背景や職業観から看護実習に関する認識が低くなったと考えられた。

また、学生が多職種連携の必要性を実感するのは臨地実習の中でどれだけ他職種と直接関わる機会があったかということが大きく関連していることが報告されている⁹⁾ことから、介護職が看護実習に積極的に関わることは看護学生自身の学びのみでなく、介護スタッフ自身の学びにもつながり、相互に多職種連携の必要性を実感できることが考えられた。今後、看護と介護の役割分担を明確にしながら、看護学生と介護スタッフが相互にコミュニケーションを促す介入や関わり方の工夫が必要であると考えられた。

2. 実習指導者とスタッフによる在宅ケア実習の認識の比較について

今回のアンケート調査の対象者のうち実習指導者は21

名であり、指導者の職種では看護職8名、相談職・介護支援専門員7名、介護職5名、その他1名であった。

実習指導者とケアスタッフの認識を比較した結果、実習指導者が全項目で平均得点が高く、特に学生への関心・学生との接触状況・実習方法・実習の影響などの項目で有意に高くなっていた。

一方、実習指導者と比較して、ケアスタッフは実習に対する興味・関心が低く、実習方法の目的や内容が理解されていない、学生との関わりが少ないなどの課題が明らかとなった。

これまで在宅ケア実習における施設との事前調整においては、施設管理者や実習指導者との調整が中心であり、実習指導者以外のケアスタッフへの伝達が十分ではないことが考えられる。今後、実習の目的や内容・学生との関わり方などスタッフに対しても理解を求め、すべてのスタッフが学生と積極的に関わり、学生の实習に関心を求められる様な工夫が必要と思われる。

3. 自由記述内容について

自由記述では270の記述内容が得られ、実習に関する学生の学びに関心があり、「利用者への接し方を見直すことができた」などスタッフ自身の学びや振り返りにもつながり、今後も実習を受け入れたいとする好意的な回答が多くを占めていた。

一方、今後の課題と思われる記述内容についてカテゴリー化を行った結果、「学生の積極性の不足」「学生との関わり方の不足」「実習目的や内容の理解不足」「実習期間の短さ」「利用者や業務への悪影響」「実習の受け入れの困難感」の6カテゴリーが抽出された。

「実習目的や内容の理解不足」や「学生と関わる機会がない」のカテゴリーについては実習の目的や内容・学生との関わり方などスタッフに対しても理解を求め、すべてのスタッフが学生と積極的に関わり、学生の实習に関心を求められる様な工夫が必要である。

「実習期間の短さ」のカテゴリーは“2日間の実習では学ぶことが限られてくる”や“もっとたくさん教えたいことはあるが、2日間だったので残念”などから構成されていた。学生のアンケート結果からも学生は楽しく学びを深めており、実習期間を長くしてほしいとの要望も多く聞かれる。今後、さらに在宅ケアの重要性が高まることが予測されることから、現在の在宅ケア実習の期間の検討は今後の重要課題であると思われる。

「学生の積極性の不足」のカテゴリーは“学生により積極的に差が見られる”や“わからないことを積極的に聞いてほしい”などから構成されていた。学生の消極的な態度は実習の学びに大きく影響するとともに、ケアスタッフの実習受け入れの意欲低下につながる事が考えられ、学生への早急な意識改善や指導が必要であると思

われた。

「利用者や業務への悪影響」のカテゴリーは“自分の業務ができず、実習の日は残業して補っている”や“知らない人の顔を見ると落ち着かなくなる利用者さんがいる”などから構成されていた。業務への影響に関する記述は実習指導者が多くを占めており、実習指導者に関する研究結果によると、実習指導に対する負担感や困難感に関連する内容^(9~10)が多く、実習指導者が困難を抱えながら指導者役割を担っている現状が報告されている。実習指導者が役割を果たすには教員がいかに連携を促進できるのか、いかに協働するための活動が行えるのかが鍵になってくる⁽¹¹⁾ことから、実習指導者の業務の影響を最小限にするように学生の受け入れ人数や日程など、改善を要する細やかな事前調整が必要であると思われる。また、利用者への悪影響に関しては実習指導者やケアスタッフと利用者への影響の確認や利用者個々の状況に合わせた対応を検討することが必要であると思われる。

「実習の受け入れの困難感」のカテゴリーは“受け入れの態勢が整っていない”や“在宅ケアのことを知ってもらいたい気持ちはあるが、個人の家に入れていただくので難しいところもある”，などから構成された。北部地域は医療・介護・福祉サービスの慢性的な不足に伴い、在宅ケア実習施設も不足しており、実習施設として無理をお願いしている施設もある。今後、実習施設の意向を確認しながら学生受け入れの回数や人数などの調整を検討する必要がある。しかし、学生が在宅ケア施設で実習を行うことは学生だけの学びではなく、施設スタッフのケアの質向上のためにも意味のあることだと考えられ、多職種連携や協働を考慮した北部地域全体のケアの質向上につながる在宅ケア実習として取り組むことが重要であると考えられた。

VI まとめ

本学在宅ケア実習を受け入れている24施設のケアスタッフを対象に、在宅ケア実習の認識について無記名自記式アンケート調査を実施した。その結果、以下の課題が明らかとなった。

1. 職種による比較では、介護職で有意に実習の認識が低い傾向が認められた。介護職が実習に積極的に関わることが看護学生自身の学びのみでなく、介護スタッフ自身の学びにもつながり、相互に多職種連携の必要性を実感できることが考えられた。
2. 実習指導者と比較して、ケアスタッフでは実習に対する興味・関心が低く、学生との関わりが少なくなっていた。実習の目的や内容・学生との関わり方などスタッフに対しても理解を求め、多くのケアスタッフが

学生と関わり、学生の実習に関心を求められる様な工夫が必要である。

3. 記述内容から実習の課題についてカテゴリー化を行った結果、「学生の積極性の不足」「学生との関わり不足」「実習目的や内容の理解不足」「実習期間の短さ」「利用者や業務への悪影響」「実習の受け入れの困難感」の6カテゴリーが抽出された。
4. 「実習期間の短さ」について、学生のアンケート結果からも楽しく学びを深めており、実習期間を長くしてほしいとの要望も多く聞かれる。さらに在宅ケアの重要性が高まることから、現在の在宅ケア実習の期間の検討は今後の重要課題であると思われた。
5. 「学生の積極性の不足」について、学生の消極的な態度は実習の学びに大きく影響するとともに、ケアスタッフの実習受け入れの意欲低下につながる事が考えられ、学生への早急な意識改善や指導が必要であると思われた。
6. 「利用者や業務への悪影響」について、業務への影響に関する記述は実習指導者が多く、実習指導者が困難を抱えながら指導者役割を担っている現状があり、実習指導者の業務の影響を最小限にするように学生受け入れ人数や日程など、改善を要する細やかな事前調整が必要であると思われた。また、利用者への悪影響に関しては実習指導者やケアスタッフと利用者への影響の確認と利用者個々の状況に合わせた対応を検討することが必要であると思われた。
7. 「実習の受け入れの困難感」について、北部地域は医療・介護・福祉サービスの慢性的な不足に伴い、在宅ケア実習施設も不足しており実習施設の意向を確認しながら学生受け入れの回数や人数などの調整を検討する必要がある。
8. 学生が在宅ケア施設で実習を行うことは学生だけの学びではなく、施設スタッフのケアの質向上のためにも意味のあることだと考えられ、多職種連携や協働を考慮した北部地域全体のケアの質向上につながる在宅ケア実習として取り組むことが重要であると考えられた。

看護実習における学びの構造」、『福岡県立大学看護学部紀要』, 4, (1), pp.10-18.

- (4) 小森直美, 小路ますみ, 藤岡あゆみ (2007) 「本学在宅看護実習における対象事例並びに学生の技術体験に関する実態調査」, 『福岡県立大学看護学部紀要』, 5, (1), pp.34-42.
- (5) 「在宅看取りの推進をめざした訪問看護・訪問介護・介護支援専門員間の協働のありかたに関する調査研究事業報告書」平成23年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業
- (6) 蒔田寛子, 牧田光代, 矢田眞美子, 鈴木達也 (2011) 「通所リハビリテーション施設における多職種連携の実際と課題—ADL向上への利用者の希望と支援の実際から多職種連携を検討する—」 *Bulletin of Toyohashi Sozo University*, No. 15, pp.167-176.
- (7) 稲垣絹代 (2014) 「沖縄県北部地域の特性を活かした在宅ケア実習の取り組み—小規模多機能施設での実習を開始して—」, 『看護展望』, pp.28-33.
- (8) 長澤利枝, 伊東志乃, 前野真由美 「臨地実習における看護学生の「多職種連携」に関する学習の実態」 『静岡県立大学短期大学部特別研究報告書 (13.14年度版)』.
- (9) 近田敬子, 長田慶子, 堀尾加代子, 他 (1996) 「看護における臨床教育の方法に関する検討—指導上困難を感じている事柄とそのかわり方の実態から—」, 『兵庫県立看護大学紀要』, 3, pp.107-116.
- (10) 三村博美, 齊藤好子 (2001) 「臨床実習指導者のストレスに関する研究—A病院における指導者の実態調査から—」, 『三重看護学誌』, 3, (2), pp.59-68.
- (11) 山田聡子 (2010) 「看護教員が期待する臨地実習指導者の役割—フォーカスグループインタビューに基づく検討—」 『日本看護学教育学会誌』 Vol.20, No.2, pp.1-11.

引用文献

- (1) 「地域における医療及び介護を総合的に確保するための基本的な方針」厚生労働省<http://www.mhlw.go.jp/public/bosyuu/iken/p20140808-01.html>
- (2) 木下由美子 (2009) 『新版在宅看護論』, 医歯薬出版, pp.266-271.
- (3) 小路ますみ, 小森直美, 笹尾松美 (2007) 「在宅